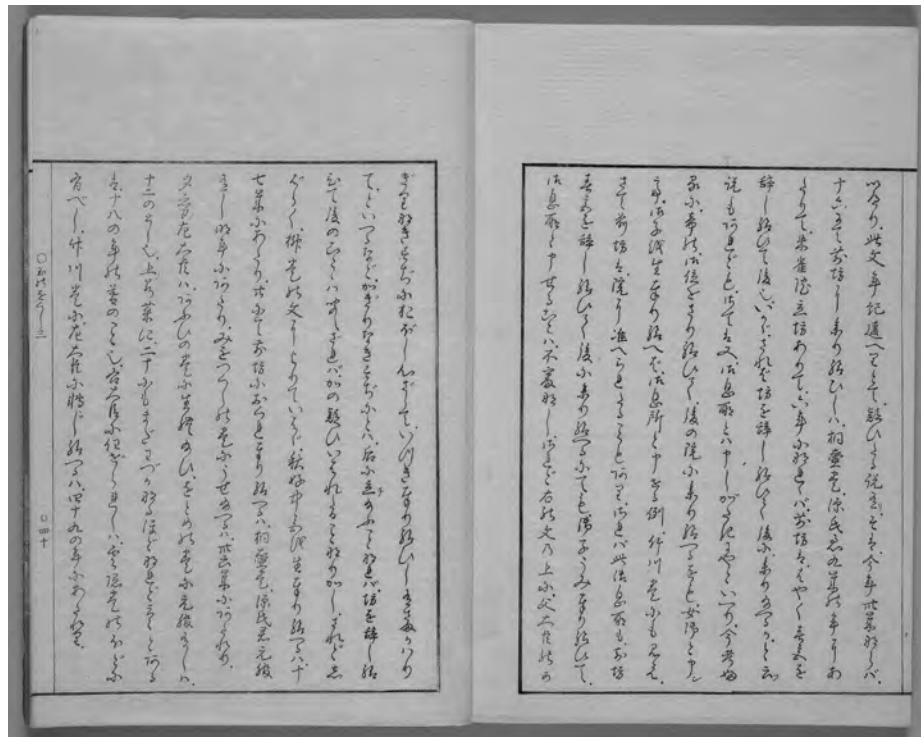


『源氏物語』の枕詞といえは

—『源氏物語玉の小櫛』初雁文庫本



『源氏物語玉の小櫛』（国文学研究資料館蔵初雁文庫本）
卷三の「人々の年立」より、六条御息所について考証したところ。

本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』は、『源氏物語』は「もののあはれを知る」ことのためにあるという明快な論を展開し、文学論に清新な観点を導入した画期的な注釈書です。寛政八年（一七九六）に成立し、寛政十一年に刊行されましたが、影響力があり、現代でも「もののあはれ」が源氏物語の枕詞のように言われることは周知のとおりです。実は、源氏物語の中で使用されるその言葉の意味あいと『玉の小櫛』の術語としての意味あいには異なる点もあるので、読むときには考え

が必要です。物語中の用例一六例は、自然や音楽等の誘発する美的な情趣、また、そうした情趣を感じ取る心性、あるいは、恋愛感情を表しています。いっぽう、物語の中心的な話柄を表す術語としての「もののあはれ」には、中世的な仏教・近世的な儒教で説かれる教え、あるいは、男女間のみだらな行いと、物語の話柄とを峻別する意味あいがあります。時代の思潮と対峙したその点に、文学論として理論的な魅力が横溢しているわけですが、「もののあはれ」を知ることが大事だと説く物語本質論の有効性は、今日も広く認められています。

『玉の小櫛』九卷九冊は、巻一と巻二に総論、巻三に年立^{しだち}、巻四に『湖月抄』の源氏物語本文の校勘、巻五から巻九に語句の注を掲載しています。

一般にはあまり知られていませんが、研究者の間で本居宣長の源氏物語研究への評価が高いのは、実は『玉の小櫛』巻三の年立があるためで、特にその内容が素晴らしいのです。

年立とは、物語中の年月の進行のこと、また、その年表を言います。主たる作中人物の年齢に関する記述等をもとに年月の推移を確定して一覧にしますが、年立を作成すると、巻序や錯簡等を正す手掛かりが得られることもあります。宣長の弟子の細井貞雄、殿村常久などは、板本の巻序が混乱していたことから難読の書であった『うつほ物語』の年立を作成し、本文の再建に努めました。

『玉の小櫛』は、古注釈書の光源氏の年齢に関する誤りを修訂した草稿的な書『源氏物語年紀考』の考えを巻三に示し、「帚木」の巻の光源氏の年齢は十七歳であると広く知らしめました。この『玉の小櫛』の考えは、やがて定論として認められ、現代のテキストに引き継がれる不滅の業績となったのです。

国文学研究資料館「初雁文庫」コレクションには須受能耶藏板の版本が蔵されていますが、これは、町奉行与力で、賀茂真淵の門人として知られた加藤（橋）千蔭の蔵書印「橋氏蔵書」「芳宜園蔵」を有し、千蔭等の書き込みも見える本です。

「初雁文庫」は、七〇点の資料を対校して『古今和歌集』の校本を作成した研究者西下経一の収集した和古書で、本館創立にあたり寄贈されたものです。

（江戸英雄）